

## ナシ族の神話に現れる神々、精靈の役割

村井信幸

### 序

周知の如く、西南中國には數多くの少數民族が居住しており、それぞれ固有の神話、世界觀を連綿と保持し續けてきた。本稿ではこれらの少數民族の中で、ナシ（納西）族の神話を考察し、その獨自の世界觀を明確にしたい。

ナシ族の主要居住地域は、中國雲南省玉龍（麗江）納西族自治縣、シャングリラ（香格里拉、中旬）縣、寧浪彝族自治縣、維西傈僳族自治縣及び四川省境域一帯であり、人口總數は約三十萬人である。<sup>1)</sup>

ナシ族は漢籍史料には「麼些」「磨些」等の名稱で現られ、歐米、中國の研究者の間では、近年でも麼些モン（Mo-sō）等の名稱が使用される場合が少なくない。その言語はチベット・ビルマ語族（中緬語族）中の彝語系・彝語支に屬する。

ナシ族はチベット佛教・佛教・道教等も信仰しているが、數多くのナシ族は、古來の宗教である東巴教を信仰している。この名稱は巫師「東巴」の名に由來する。ナシ族は固有のナシ文字（象形文字、音標文字）を持ち、巫師東巴はこれらの文字で記された「東巴經」を儀禮を行う際に吟誦する。東巴經の内容は主に神話である。（以下「東巴神話」と

記す。

ナシ族の神話中には、数多くの神々、精霊、鬼霊が登場する。これらは神話中では異なった役割を果たし、それぞれ密接な関係にある。本稿では、神々、精霊の固有の役割について考察し、それらの密接な関係を紹介することによって、ナシ族の壮大な世界観、神界を明確にしたい。筆者はかつてナシ族の固有の世界観を明確にするために、ナシ族の「神山」について考察したが、本稿においては、この問題をさらに明確にしたい。なお鬼霊の役割については、次稿で詳細に考察する所存である。

### 東巴神話中に現れる神々・精霊の役割

ナシ族の神話に現れる神々、精霊についてまず考察するが、本稿においては、ナシ族の東巴が吟誦する「東巴神話」の中で、最も代表的なものである「人類遷徙記」に現れるものを中心に紹介したい。なお本文中のローマ字表記は、J.F.Rock氏が使用したものである。まず神話の最初の部分に現れる神から論述したい。

#### 1 根源的な三神

ナシ族の東巴神話において、最も根源的な三神は英古阿格 (O-gko aw-gko)、薩英威德 (Saw-yi wia-de)、白骨大神 (Hä-ddü Ö-per) の三神である。<sup>①</sup> この三神は、天地混沌の状態から出現する。東巴經によってそれぞれ出現の順序も異なるが、ある經典では、光り輝くものが現われて、このものから呪術によって、光り輝く空(天?)が出現し、このものから呪術によってすばらしい聲を持つものが出現した。このものから呪術によって英古阿格が出現した。この神は明らかに萬物に先立って存在する根源神である。英古阿格は呪術を行って、薩英威德が出現した。この二神から白骨大神

が出現した。この三神は、いつも共に神話の最初の部分に登場し、そこから数多くの神々、精霊が出現する。そして薩英威徳から、人類（ナシ族）の父と稱される美利董主（Muan-llu-ddu-ndzi）が出現する。次に美利董主について紹介したい。

## 2 美利董主

この神の出現に至るまでの経過については、東巴經の記述は不明確であるが、薩英威徳から出現したことははっきりしている。

美利董主は呪術を使って、白い天、地、太陽、月、惑星、山、谷、湖が出現した。彼は湖岸に来て休息した。彼は湖中に自分の顔を見た。彼の涙、唾液が湖水に落ちて、そして銀、金、高貴なものが湖中に投げ込まれた。三晩の後に、光り輝く水女が出現した。彼は水女を茨爪金姆（Tsu-chuwu-a-gyi-mum）と名づけた。夕方二人は共に歩き、日中に結婚した。彼らの九人の息子は九つの家に住み、九人の娘は九つの地に廣がっていった。彼らは結婚して、九つの異なった場所に移動していった。

ナシ族の神々・精霊には、その悪の對象物である鬼霊が存在する。美利董主の悪の對象物は美利董主（Muan-llu-su-ndzi）である。兩者の對立、抗爭から東巴神話において、壯大な物語が展開する。またこの種族には東巴以外に「桑尼」という巫師が存在する。<sup>(6)</sup>

美利董主の支配領域は、白で表現され神界であり、美利董主の支配領域は黒で表現され、暗黒、邪惡の世界である。兩者の争いの發端となつたのは、美利董主が育てていた神樹の苗木を美利董主が切ってしまったことである。美利董主はその後苗木を育てるが、美利董主はさらに切ってしまう。美利董主は儀禮を行つて苗木を回復させる。兩者の抗爭は、

太陽、月の奪い合いに發展する。その結果、美利董主が勝利をおさめ、太陽、月の位置が安定する。太陽、月の位置の安定によって、生産が發展し、秩序が成立するといえるのである。

美利董主の息子「安生米委」(Su-zo-mi-ssā-ngo-wu) は、美利董主の息子「董若阿路」(Dau-zo-dee-gkyi) をだました。阿路は安生米委の地に行つて、その地を開發し、太陽、天、月を良い状態にすることを約束した。阿路は母親にこのことを話した。母は安生米委の地に行くことは、非常に危険であると反對した。阿路は約束したので行かないわけにはいかないと、母の意見に従わず、敵の領土に到着した。深夜、安生米委は阿路の犬、鶴を盗んだ。阿路は安生米委の銀と金を取つて、Pen-na"-nda-gkan-ch'ung (人間の住む地) に行き、銅と鐵の釘を仕掛けた。安生米委は黒い犬をつれて阿路を追つたが、銅と鐵の釘のために生命を失つた。

美利董主はこの時眠つており、夢の中で安生米委が釘にかかつて死んだことを知つて、彼を埋葬した。彼は溝を掘り水を満たして、籾殻で穴をふさいだ。美利董主はいつた。「安生米委の父には、決して見つからないだろう。誰も溝を掘りにこないだろう。」鳥が水を飲みに来て、美利董主は鳥をたたいた。鳥は美利董主に、美利董主が安生米委を殺したと知らせ、どのように埋めたかを報告した。鳥は「美利董主が私をたたいたから、このことを知らせた。あなたの心は痛まないのか？」と聞いた。

美利董主は Mi-ma-ssa-tdo (鬼靈) に相談した。彼らは語り合つた。「勇敢な息子は殺された。我々は鬼靈を送つて、彼の息子を捕えよう。」<sup>(1)</sup>英古鼎那 (Yi-gko dti-na) (鬼靈) が呪術を使って、一千の黒い猛鬼と Fu-gyi-na (黒い鶏) が出現した。美利董主は矢を放つて美利董主の領土を攻撃した。美利董主の天は雲でおおわれ、その鋤は錆びつき、彼は不淨になつた。その天、地、家、眼、耳、手足等はすべてが不淨になつた。

美利董主は考えることができず、相談することもできなかつた。彼と共にいた者はすべて不淨になつた。飛ぶことも

踊ることもできなかった。彼は心を病んだ。彼は金の魚を美利董主の領土へ偵察のために送った。美利董主はその舌を切った。このことは魚に舌がないことの起源である。美利董主は白鷺を敵の領土に送ったが、黒鷺が追い拂った。美利董主は白鹿を送ったが、黒い犬に追い拂われた。鹿は崖をよじ登り、そこで美利董主の犬がほえると「罅」が聞こえた。美利董主は犬を打とうとしたが、美利董主の黒い鹿にあたり、鹿はわめいた。その聲は山と崖で鳴り響いた。これは罅の起源である。美利董主は黒鹿の肉を鷹に與えたが、鷹は食べなかった。その肉は不淨であり、鷹は吐いた。これは「嘔吐」の起源である。美利董主は肉を龍に與え、龍は吐いた。彼は不淨な肉を龍に與え、龍は犬を殺した。これは龍が蹄のある動物を殺すことの起源につながる。狐の鬼靈は不淨な肉を食べた。そこで獅子は狐を殺した。これは獅子が、爪のある動物を殺すことの起源である。黒鹿の頭は、天(空)で不淨になった。その肺は太陽で不淨になった。その肝臓は、月で不淨になった。その骨は、岩で不淨になった。その皮は、土で不淨になった。その血は、水の中で不淨になった。その腸は楚鬼に變わった。その耳は、木の中で不淨になった。鹿の角は高山で不淨になった。その耳は山嘴で、その腿は崖で不淨になった。鹿の口から三滴の唾があらわれ、不淨な水が出現した。その心臓から黒い鶏が出現し、この鶏は、争いと口論を美利董主の領土に解き放った。そこで彼は巫師に天宮占いをしてもらい、骨と肩脚骨にすべての悪い兆候が現れた。彼は *Yi-shi-ko-zo* (美利董主の東巴) に依頼して、金、銀の松明を取って、天、地が不淨ならぬようにした。そして、神々、精霊が不淨にならないようにした。美利董主は *Yi-shi-ko-zo* に頼んでさらに数々の儀禮を行った。

美利董主は黒い山羊を使って、敵の領土を動き回った。半去勢のヤクの乳をしぼり、七日七晩儀禮を行った。一對の半去勢のヤクを使って、楚鬼を鎮壓した。黒い不淨な岩を取り、美利董主の領土を攻撃し、不淨な黒湖を干上らせた。美利董主の木を切り倒し、その地に投げ捨てた。

美利董主とその妻は、ヤクと牛の乳をしぼり儀禮を行った。この儀禮の結果生命の素を得た。美利董主の天は、星で充ちあふれ、地は草でおおわれて、太陽は熱く、月は輝き、彼は九男、九女を得た。

不浄の起源については明確でない。最初、美利董主は黒い地に住んでいた。その時代に地は分かれていった。美利董主の天は誤りなく出現し、すべて整然としていた。美利董主は、その天を作ることができなかった。彼はよこしまな考えを抱いた。呪術を使って、毒をいっぱい美利董主の領土にまいた。美利董主の白い山には黒雲がさまよった。その崖のふもとから毒水があふれた。そのために美利董主とその天と地は不浄になった。彼の眼、心臓、手等も不浄になった。彼はどうしたらよいかわからなかった。彼は桑尼 (Tindan) のもとに行き、桑尼は天宮占いをして、その鋭い眼は原因をつきとめた。桑尼は儀禮を行い、そこですべてが吉兆になった。

そこへ美利董主の青い鬘のロバと黄色い男が現れ、両者は交わり仄鬼 (Dag) の賢い娘が生まれた。さらに赤目の仄鬼が生まれた。彼らは呪術を用いて、九つの眼の吸血の雌牛が生まれた。そして、九種類の鬼靈が生まれ、美利董主の翼のある黒雲のような馬、赤い尾の魚のような毒鬼<sup>8</sup>、さらに獨眼のカモシカが生まれた。これらの鬼靈は、美利董主の地に放たれて笑いをもたらした。美利董主は書聞は考えることができず、夜は悪い夢を見た。彼は何もできず、足の速い少年を天上の巫師のもとへつかわした。巫師は天宮占いをして、九種類の鬼靈が災いをもたらしていることを知り儀禮を行った。

耿拉納嫫 (鬼靈) が出現し、黒い羊に乗った女の鬼靈も出現した。両者は交わって九人の楚鬼が生まれた。楚鬼は人々の地に災いをもたらした。人間の地に楚鬼はいたるところで出現し、災いをもたらした。しかし、東巴は儀禮を行って、その結果美利董主は息子阿路を美利董主に殺されたにも関わらず、最終的には勝利を得る。

以上の物語を考察して以下の點が指摘できる。美利董主の領土は白で示され、美利董主の領土は黒で示される。ナシ

族の社會には、「尙白嫌黒」の觀念が古くから存在し、この神話に明確に表現されている。

美利董主と美利術主の對立から、すべての争いが發生する。これは「争いの起源」ということができる。兩者の争いによって、天地におけるすべての生物に死が發生し、このことは「死の起源」と考えられる。さらに數多くの鬼靈、動物が出現し、災いが起こる。そして汚れ（不淨）も發生する。これらは儀禮を行うことによって鎮壓される。これは「儀禮の起源」と考えられる。

また美利董主と美利術主の争いの原因は、太陽、月の奪い合いであった。美利術主は美利董主の太陽、月を盗み、美利董主は太陽、月を神山に結びつける。このことによって、太陽、月の運行は安定し、天候が安定して、生産が發展する。このことはナシ族の世界觀において重要な役割を果たしている。

東巴經においては、このように重要な役割を果たしている美利董主は、ナシ族の最も有名な神話「人類遷徙記」にはあまり登場しない。次にこの神話で中心的役割を果たしている崇忍利恩 (*Tso-za-lin-gnighn*) について考察していきたい。

### 3 崇忍利恩

崇忍利恩は、「人類遷徙記」に登場する「地上に降りた最初の人類」である。「人類遷徙記」は、ナシ族の間に廣く傳承されている創世神話である。

その梗概を簡単に紹介すると、天地混沌の状態から神々、精靈、鬼靈が出現する。そして天、地、神山が創造される。次に人類の起源が語られ、人類の始祖兄弟姉妹の近親相姦が原因で、世界は不淨になる。一人の男が、洛大神、色大神の領土を侵略して傷つける。その弟崇忍利恩は洛大神を介抱する。洛大神は、彼に洪水が起こるから、ヤクの皮鼓に隠れて難を逃れよと指示する。唯一人難を逃れた崇忍利恩は、天神 (*Dzi-la-á-pu*) の住む天に登り、その娘の天女と結婚

する。二人は地上に降りて、後に三人の息子が誕生して、長男がチベット（藏）族、次男がナシ族、三男がペー（白）族の祖となる。崇忍利恩が天女と共に地上に降臨する時、天神から彼らに数々の穀物、家畜が與えられる。その中で蕎麥が穀物を、山羊が家畜を先導する。つまり、地上に降りた最初の人類と天女が地上に降りる時、農耕と牧畜が地上にもたらされ、彼らの三人の息子がチベット族、ナシ族、ペー族のそれぞれ祖となるという「民族の分離」が語られるのである。

崇忍利恩は、地上に降りた最初の人類であると共に半神半人であり、ナシ族の社會で、ほとんどの儀禮の際に彼に對する崇敬が行われる。崇忍利恩と天女が地上に降りる際に、農耕、牧畜が誕生することは、ナシ族の神話、社會、歴史において、非常に重要な意味を持つと思われる。

祭天儀禮の際に東巴によって吟誦される「祭天人類遷徙記」と題する東巴經<sup>5)</sup>では、その後も物語が續く。崇忍利恩から五代後の高勸趣（高勸高趣、(Gka-wi-ta-sin)の四人の息子が束、葉、買、何の四氏族の祖となるという「氏族の分離」<sup>6)</sup>が語られる。束氏は麗江ナシ族の和氏、葉氏は木氏、買氏は中甸ナシ族、何氏は永寧ナシ族に後に發展していくのである。次に氏族の分離の元となった高勸趣について考察したい。

#### 4 高勸趣

崇忍利恩の子孫である高勸趣についての物語は数多くの東巴經に記されている。<sup>7)</sup>

昔、高勸趣はその父我高勸(O-gka-wi-ta)と共に高山に住んでおり、麻を刈り、狩獵をしていた。ある時父子は深山で大猪を仕止めた。彼らは猪をかきいで喜んで歸った。村の入口についた時、我高勸は鉞を山に忘れたことに氣がついて、息子に先に歸るようについて鉞を取りに歸った。



高勒趣は家に歸り、獵人の規則に従って、猪を切り裂き客人を招いた。客人が到着して準備が整ったが、父はまだ歸らなかつた。高勒趣は不安になり、探しに行ったが見つからなかつた。後に彼は父は山神（署、龍王）に捕えられたと聞いて再び探しに行った。途中、二匹の白と黒の大蟒が待ちかまえていた。二匹は襲いかかってきて、高勒趣が鉞を抜く前にまとわりついてきた。その大口で彼の頭にかみついたが、彼は左手で黒蛇の首をつかみ右手で白蛇の首をつかんで締め上げた。蛇の首が細いのは、このことに由来する。

翌日、二頭の大水牛に出會い、高勒趣は兩脇からはさまれた。彼は兩手でそれぞれの牛の角をつかんだ。牛の角が曲がっているのは、このことに由来する。虎、豹、獅子、熊、豺狼、猪はこれを聞いて、高勒趣は鉞がなくても勇敢であり、鉞を使ったら自分たちの首はないと思ひ、あわてて逃げていった。

高勒趣は山神斯汝（龍王）の家についた。父は縛られてすだれの上に置かれて涙を流しており、高勒趣の額に涙がかつた。高勒趣はいった。「父よ、あなたを助けにきました。我高勒はいった。「息子よ山神は私を捕えて虐待しているのだ。」高勒趣はいった。「私が山神（龍王）にあなたを放すようにいいます。一緒に歸りましょう。」我高勒は「山神（龍王）は色々なものを要求して、私を放さないだろう。」といった。

高勒趣は山神（龍王）のところへ行った。山神（龍王）は「何をしにきたのか。お前の父親を放すわけにはいかない。」といった。しかし、山神（龍王）は、蛇の首が細くなり、水牛の角が曲がっているのを見て恐くなり、我高勒を解放した。二人は無事に歸ることができた。他の東巴經には、我高勒は死んで、高勒趣は數々の儀禮を行って、父の魂を鎮魂したと記されている。

ナシ族の世界観では、人類と龍王（署）は元々異母兄弟であり、隣接した領域に住んでいた。人類は人間界、家畜を管理して、龍王は自然界・野獸を管理していた。前記した崇忍利恩も署の領域を侵したために災いに會う。（これにつ

いては後述する) 我高勒は龍王の猪を殺したために龍玉に捕えられ、高勒趣は彼を救いに行く。このようなことから崇忍利恩、高勒趣は人類と龍王の領域をつなげる役割を果たしていると推斷できる。また高勒趣も崇忍利恩と同様に、ナシ族の祖先の系譜に組み入れられて、彼の四人の息子は束、葉、買、何の四氏族の祖となる。そのうち葉氏の祖は、ナシ族を約二百年間支配した木氏土司の祖となったという歴史的役割を果たしている。束氏は農民であり、和氏の祖先となっている。現在東巴には和姓が多く見られる。次に宗教の起源を考えるためにも、東巴教の開祖である丁巴什羅について考察したい。

## 5 丁巴什羅 (Dko-mba. Shi-lo)

以上で「人類遷徒記」に登場する神々、精靈について考察してきたが、次に紹介する丁巴什羅は「人類遷徒記」には登場しない。この神は、「人類遷徒記」に現れる神々とは別系統に属するのではないかという各種の説がある。丁巴什羅は東巴教の開祖であり、巫師東巴は自分達を、その弟子の子孫であると認識している。

丁巴什羅に関する神話<sup>(10)</sup>は、天地混沌の状態から始まり、神々、精靈、鬼靈が出現する。彼は十八層の天に住み、天上でラマ僧と争うが、地上では可庶瑪(女魔鬼)が、人間、動物を食い殺している。人類は白蝙蝠を天上に使者として送り、可庶瑪を鎮壓するために、丁巴什羅に地上に降臨してくれることを願う。丁巴什羅は神々と相談して地上に降臨し、可庶瑪を鎮壓する。その後彼は祟りにあって、毒鬼に殺されるが、三人の東巴とその三百六十人の弟子が彼の魂を救い、その魂は安息を得る。

丁巴什羅は女鬼、鬼靈を鎮壓して、最初の巫師(シャーマン)としての役割を果たし、その職務は弟子である東巴に繼承される。そして東巴教が成立する。東巴教はチベット古來の宗教であるボン教の影響を強く受けており、ボン教の

開祖シェンラブ・ミールボと丁巴什羅は同一のものであるといわれる。西南中國少數民族の中でも、ナシ族の神話にはチベットからの影響が強く見られ、丁巴什羅を研究することによって、ナシ族神話におけるチベットからの影響を考察することができるといえよう。

前記した如く、人類と署（龍王）は隣接した領域に住み、人類が龍王の領域を侵したために、龍王は天に行つて丁巴什羅を招く。丁巴什羅が調停して、龍王と人類の間に争いがなくなり、地上に平和が訪れる。<sup>13</sup>このように丁巴什羅は人間界と、龍王の支配する自然界をつなげる役割を果たしているのである。

## 6 洛大神 (Ntu)、色大神 (Ssa)

洛大神と色大神は、陽神、陰神であり、ナシ族の間では、「門神」として崇拜されている。彼らは男神、女神一對のものとして神話に登場する。ナシ族は現在生活できるのは、この二神のおかげであると考へている。東巴神話に記されている兩神の恩恵は下記の如くである。

洛大神が生まれて降臨したために、チベット族とナシ族は争わなくなった。洛大神は星で満ちた天を創造した。廣い野原は色大神が廣げたものだ。晝と夜の長さは洛大神が整えたものだ。頑丈な岩は洛大神だ。木は色大神が作った。山が木でおおわれるようにしたのは色大神である。家を作り、寒さを防ぐことができるのは洛大神のおかげだ。崖から水を引いて、田を灌漑したのは洛大神だ。東巴の職を父から子へと繼承させて、鬼靈を鎮壓できるようにしたのは洛大神だ。家が子孫で満たされるようになったのは洛大神のおかげだ。長壽は洛大神によつてもたらされた。太陽と月の動きを安定したのは洛大神だ。東巴と桑尼が鬼靈を見つけることができるようになったのは洛大神のおかげである。<sup>14</sup>

以上の如く、この兩神の役割は、社會、宗敎的なもの、そして現在の自然環境を成立させたことも大きい、長壽等

生命に關係するものが特に重要である。洛大神は延壽の儀禮で大きな役割を果たしている。人間の長壽に關して語る東巴經「延壽經」の内容を紹介すると下記の如くである。<sup>15)</sup>

人間の壽命は本來は百年であった。人間の壽命を支配する聖樹の葉の色が青から黄色に變わるのに、ちょうど百年かかった。その時が來ると、洛大神は黄色の竿で黄色い葉（老人の生命）のみを打ち落として、青い葉（若者の生命）を残しておいた。青い葉は成長して、百年かかって黄色に變わっていった。

ある日、洛大神が天上で神々と遊び戯れているうちに、壽命の木の黄色い葉を落とすことを忘れてしまった。洛大神が氣づいた時には、太陽が沈みかけており、彼はあわてたが間に合わなかった。洛大神は急いで聖樹のもとにたどりつき、青い葉、黄色い葉の區別なしに白銀の杖で打ち落とした。そのために青年も老人も皆死に絶えた。この狀況で天空は搖れ動き、天空と大地を支える神山の修築が神々によって行われる。神山の修築が終了して、その頂上で洛大神は色大神と壽命の分配の相談をする。三日後の夜明けに、洛大神は天高閣崖の下で壽命を分けて、高々と叫んだ。「誰かこの十萬年の長壽をいらぬか。」人間は寢込んでいて答えなかった。十萬年の長壽は石の手に渡ってしまった。人間は眠り續けて五年の壽命しかもらえなかった。人間は晝も夜も泣き叫んだ。鶏は百年の壽命を得たが、長く生きても翼や尾がすり切れてしまう。食料をつついて食べても嘴がすり切れてなくなってしまう。鶏も泣き出した。ゆえに洛大神の指示通りに人間は百年に、鶏は五年に壽命を交換した。

以上の如く、この兩神の役割は非常に數多く、人類と最も密接な關係にある神であるということが出来る。しかし、この神の最も重要な役割は、萬物の生命に及ぼす影響ということができよう。

次に洛大神、色大神の「人類遷徙記」における役割について一言すると、崇忍利恩の兄弟が兩神の領域を侵し、彼らを傷つける。崇忍利恩は二神の介抱をする。洛大神はその禮として、もうすぐ洪水が起るので、ヤクの皮鼓に隠れて

逃れるように指示する。兩神の領域を侵した兄弟は懲罰を受ける。つまりこの兩神は崇忍利恩の守護神としての役割を果たしているといふことができる。

### 7 盤神 (Paan)、禪神 (Saan)

盤神は九人の男神で、禪神は七人の女神である。「人類遷徙記」における最も重要な役割は、盤神が天を創造し、禪神は地を創造したことである。盤神と禪神は相談し合わなかつたので、最初天地創造はうまくいかず、天地は揺れ動いていた。そこで神々、精霊は集合して、居那什羅神山を修築した。そこで天、地は安定した。天、地が安定したことによって、天體の運行等の秩序が成立するのである。

盤神、禪神は鬼靈の中でも、特に毒鬼と密接な関係がある。昔、九人の盤神は毒鬼の黒いヤクを射殺した。盤神はその肉を食べて、血を飲み、骨をかじった。そのために盤神と毒鬼の間に争いが生じた。盤神は毒鬼の報復を受けることになった。毒鬼は盤神の魂を盗み水中に捨て、猛獸に家畜を傷つけさせて、食料に毒薬を投げ込んだ。

盤神は天上の東巴に依頼して、東巴は儀式を行った。儀式が終了してから盤神は病氣が治り、痛みもなくなり、長壽も富も充足した。盤神は九人の毒鬼の魂を黒・白境界の地に送り、九層の黒土の下に埋葬した。

その後の時代、善良な一家の主人は盤神の良き子孫であったが、季鬼、其鬼、孔鬼、孔鬼、補鬼の裂痕が現れた。そして、八卦の後に肩胛骨に季鬼、其鬼、孔鬼、補鬼の筋がはっきりと現れた。善良な一家の主人は、足の速い少年を使って、有能な祭司に依頼した。有能な祭司は白いヤクの毛氈を使って、神壇に獻物を獻げて儀式を行い、一家の主人は安息を得た。

以上の如く、盤神、禪神は、天地創造を行い、天地に安定をもたらし、鬼靈の害を鎮壓したという點で、神話上重要

な役割を果たしている。

## 8 高神 (Ngaw)、吾神 (Wu)

高神は生命の神で、戦神である。象形文字經典ではこの神は「旗」で描かれる。旗は戦場に運ばれるからである。ナシ族の各々の家庭には高神がいる。このことから、高神は家の精霊であることが理解できる。高神はナシ族の敵に打ち勝たしめる守護霊としての役割を果たしている。高神は "Ngaw ba" という儀禮で崇拜される。高神に對しては、數多くの儀禮が行われる。

吾神は高神の従者であり、東巴神話には、高神、吾神は一緒に登場する。吾神は世話をするものであり、おそらく元々は高神の奴隸であったと想定されている。<sup>8)</sup>

## 9 署 (Ssu. 龍王)

署は龍王であり、水に住む精靈である。神話中では人類と署は異母兄弟であった。人類は「人間界」を支配し、署は「自然界」を支配した。しかし、人類は絶えず署の領域を侵略して、獸を殺し、植物を切り倒し、河川を汚染させた。署は怒り、人類の魂を盗んだ。彼らは病氣になった。署は家畜にも傳染病を起こした。

署はその父の寶物を人類には分け與えなかった。そして署は人類に天地をひらくこと、村をつくること、山上の柴を刈ること、高原で放牧をすること、犬をつれて狩りをするを許さなかった。署の王「署美納布」(Oso-na-to-chn)には妥協はなかった。人類は天上の丁巴什羅に訴えた。丁巴什羅は神鵬をつれて地上に降りてきて、「署美納布を恐れることはない」といった。丁巴什羅と神鵬は對策を相談した。神鵬は署美納布をこらしめた。署美納布は「署

は人類とは争わない。人類が先に署の領土を侵したのだ。人類は署の泉水で数々の動物を殺し、魚を取り、蛇や蛙を殺した。今（東巴什羅に願って）調停している。私に酥油、小麦粉、翠柏、線石松を献上してほしい。」丁巴什羅は調停を行って、人類に蛇、蛙等を殺すことを禁じた。そして署には薬等を與えた。東巴は白羊を毛毡で神壇をつくり、青麥、白米等を神糧として署に献げた。そして、金、銀、綠松石、黒ヒスイを供物とした。こうして地上に平和が訪れた。

署は崇忍利恩とも非常に密接な關係にある。崇忍利恩は、白い足のヤクに鹽水を飲ませている時に、綠の首の小蛇を踏みつぶした。そのために彼の魂は署に盗まれた。崇忍利恩は、山から降りて家に歸ると病氣になった。その妻補紅婁白命は、東巴に依頼して儀禮を行った。この祭署儀禮を行ってから、崇忍利恩の病氣は治り、痛みもなくなって、心の安らぎを得た。祭署儀禮が行われたことによって、署も満足した。<sup>9)</sup>

このように祭署儀禮は、ナシ族の間で最重要なものであり、最も數多く行われるものの一つである。通常はたて續けに家畜が病氣にかかった時に、泉の周邊か自宅で行われる。この儀禮を行う際に、東巴は膨大な量の東巴經を吟誦する。これらの東巴經は、J.F. Rock氏、中國の研究者によって收集、翻譯されている。

### 10 神々、精靈相互の關係

以上の如く、ナシ族の神話に現れる神々、精靈の役割について考察した。神々と鬼靈との争いから、「憎しみ」「抗争」が生まれる。地上に降りた最初の人類は、地上に降臨した時、穀物、家畜をもたらした。つまり、これは農耕、牧畜の「起源」である。自然、萬物は洛大神がつくり上げたものであるが、この神の最も重要な役割は、人間、動物の生命の期限を定めたこと。つまり「生命の起源」を決定したことであるといえる。また盤神、禪神によって天地創造が行われて、このことによって自然の運行に安定がもたらされて、秩序、文化が生まれることが理解できる。

これらの神々、精靈は相互に非常に密接な關係にある。まず、「民族祖神」という觀點で、美利董主、崇忍利恩、高勒趣の三神の關係を考察すると、美利董主は人類（ナシ族）の父であり、その九男、九女は成長して、それぞれの地に行つて、農耕、牧畜を行い發展していく。崇忍利恩の三人の息子は、長男はチベット族、次男はナシ族、三男はペー族の祖となる。ここで「民族の分離」が行われる。高勒趣の四人の息子は、ナシ族の束、葉、買、何の四氏族の祖となり、ここで「氏族の分離」が行われる。ここまでが神話の時代といえるのである。この三神の關係を考察することによって、民族の成立、進歩、發展を明確にすることができると思われる。<sup>(2)</sup>

そして崇忍利恩（人類）と署も非常に密接な關係にある。元々兩者は異母兄弟であつた。人類が署との約束に違反したために、人類と自然界の間に對立、抗争が起るが、その和解によつて、人間界と自然界に調和がもたらされる。このように考えると、「兩者の關係は萬物に非常に重要な役割を果たしているといえる。そして調和をもたらしすものは、祭署儀禮であり、「儀禮の起源」という役割も果たしているということも明確にできるのである。<sup>(3)</sup>

## 結語

筆者はかつてナシ族の固有の世界觀を明確にするために、神山の問題について論究した。本稿では、固有の世界觀をさらに明確にするために、「ナシ族の神々、精靈の役割」について考察した。

神々、精靈の役割を考察することによつて、神々と鬼靈の争いから、あらゆるものが誕生することがまず推斷できる。そして、地上に降りた最初の人類の三人の息子の時代に、民族の分離が完成される。さらにこの時代に、地上に農耕、牧畜がもたらされる。この時代から五代後に「氏族の分離」が成立する。このことから神話の歴史的發展を理解することができるとができる。



さらに神々の天地創造、鬼靈との争い、神々と人間の生命との関り、丁巴什羅の調停により人類と自然界に調和をもたらした宗教、儀禮の成立に致るまでの諸問題を明確にすることができると考えられる。

なお本稿においては、神々、精靈の役割について考察したが、鬼靈の神話上の役割、それぞれの固有の性格については、稿を改めて詳しく考察する所存である。

注

- (1) 黒澤直道『ナシ(納西) 族宗教經典音聲言語の研究—口頭傳承としての「トンバ(東巴) 經典」—』雄山閣、四一五頁、二〇〇七年。
- (2) 村井信幸「ナシ族の神話中の神山の役割に關する—考察」『漢學會誌』57號、二〇一八年。
- (3) J.F.Rook 著、村井信幸譯「Mo-so (Na-ki) 族の文獻中の洪水説話」『中國大陸古文化研究』第八集、一九七八年、J.F.Rook The Na-ki Naga Cult and Related Ceremonies Serie Orientale Roma, IV (Part II) Is MEO Roma, 1962、和志武整理「人類遷徙記」『民間文學一九五六年七月號、雲南省民族民間文學麗江調查隊搜集翻譯整理』創世紀』雲南人民出版社、一九七八年、李霖燦『摩些族的故事』亞洲民俗、社會生活專刊③東方文化供應社、一九七〇年參照。
- (4) 白庚勝『東巴神話研究』社會科學文獻出版社、七二頁一九九九年、J.F.Rook A Na-ki-English encyclopedic Dictionary. Serie Orientale Roma, XXVIII IsMEO Roma, 1962.
- (5) 東巴文化研究所編譯「瓊珠鬼儀式・董術戰爭」『納西東巴古籍譯注全集』第二十五卷、「董神與述鬼的故事」『納西東巴古籍譯注全集』第三十二卷、「除穢・董述爭戰」『納西東巴古籍譯注全集』第四十一卷雲南人民出版社、中共麗江地委宣傳部編「東術爭戰記」『納西族民間故事選』上海文藝出版社參照。
- (6) ナシ族には、東巴の他に桑尼(Li-bu) と呼ばれる巫師がいる。桑尼は東巴とは異なり、ナシ文字を讀むことができない。楊福泉「論納西族巫師、桑尼」(桑帕)『納西學論集』民族出版社二〇〇九年。
- (7) 英古鼎那は、すべての鬼靈の本源とされており、天界の神々の中で英古阿格のみが打ち勝つことができる。白庚勝『東巴神話研究』一〇七頁。

- (8) 毒鬼は「魔」鬼という意味であり、東巴神話には常に仄鬼と共に登場する。その最大の敵は丁巴什羅である。白庚勝『同上』一〇一頁—一〇二頁
- (9) J.F.Rock The Muñ-ḥpḥ Ceremony or the Sacrifice to Heaven as practiced by the Na-khi, Monumenta Serica Vol. XIII 1948 雲南省民間文學集成辦公室編『祭天古歌』中國民間文藝出版社一九八八年。
- (10) 高勒趣の四人の息子にこいつは、J.F.Rock The Na-khi Da Nv Funeral Ceremony with special referente to the Origin of Na-khi Weapons, Anthopos, vol.55, 1955 参照。
- (11) J.F.Rock The Na-khi Nāga Cult and Related Ceremonies, 中央麗江地委宣傳部編「高勒趣」『納西族民間故事選』。
- (12) 東巴文化研究所編譯「超度什羅儀式・迎請什羅・殺三百六十個鬼卒・殺希固松瑪」『納西東巴古籍譯注全集』第七十二卷、一九九九年、「超度什羅儀式・求威力・賜福澤」『納西東巴古籍譯注全集』第七十三卷一九九九年、J.F.Rock The Birth and Origin of Diona mba Shi-lo, the Founder of Mo-so Shamanism • Aribus Asiae, Vol.7, 1937
- (13) 東巴文化研究所編譯「樓埃鬼儀式・白蝙蝠求取祭祀古々經」『納西東巴譯注全集』第二十四卷一九九九年。
- (14) J.F.Rock 著村井信幸譯「Mo-so (Na-khi) 族の文獻中の洪水説話」J.F.Rock The Na-khi Nāga Cult and Related Ceremonies (part I • II)
- (15) 李霖燦「延壽經」『摩些族的經典研究』東方文化書局一九七一年、村井信幸「ナシ族の神話、傳承に現れる鶏の役割について」『東洋研究』第128號、一九九八年。
- (16) J.F.Rock 著村井信幸譯「Mo-so (Na-khi) 族の文獻中の洪水説話」五十頁
- (17) 東巴文化研究所編譯「退送是非災禍・盤神神與毒鬼仄鬼的斗争」『納西東巴古籍譯注全集』第三十六卷一九九九年。
- (18) 東巴文化研究所編譯「納西東巴古籍譯注全集」第四卷、J.F.Rock 著村井信幸譯「Mo-so (Na-khi) 族の文獻中の洪水説話」五六—五七頁。
- (19) 白庚勝「東巴神話研究」九一—九二頁。
- (20) 東巴文化研究所編譯「超度放牧牦牛、馬和綿羊的、美利董主、崇忍利恩和高勒趣之傳略」『納西東巴古籍譯注全集』第六十七卷、一九九九年。
- (21) 東巴文化文化研究所編譯「祭署・署的來歷」『納西東巴古籍譯注全集』第五卷一九九九年、「祭署・祭署的六個故事」「祭署・崇忍利恩的故事」『納西東巴譯注全集』第七卷一九九九年。